考教言

Thought about Education

高 松 洋

Hiroshi TAKAMATSU

つい先日、実家の物入れの段ボール箱から本協会が日本工業教育協会であった時代の1990～1992年の「工業教育」誌や文部省高等教育局の報告書「変革期の工学教育」など数冊が偶然出てきた。当時は、学部教育に携わらない大学研究所の助手、助教授であったが、ちょうど大学設置基準の改正（大綱化）が行われた時代であった。その時の文章には「改革」や「パラダイムシフト」、あるいはそれに類する言葉が頻繁に使われていた。工学系人材の需給の量的質的インバランスが問題となっていた時期のようである。それから四半世紀経った今、昔と比べて何が変わったのだろうか。学科や専攻の種類と名前が増え、大学院の定員は増え、大学が法人化して自由度が増し…といったシステム改革に起因した変化は当然ある。しかし、教育の目標、すなわち育成すべき人材像はほとんど変わっていない。当時の文章にはグローバル化やイノベーションという言葉こそ使われていないが、革新、創造、国際、リーダーというキーワードが重要であることは当然ながら述べられてある。しかし、今、「イノベーションを牽引するグローバルリーダー」育成のための特別プログラムがあちらこちらでプロジェクトとして行われているのである。また、当時は「基礎研究ただ乗り」批判を受け、ノーベル賞受賞者が日本ではわずか5人しかいないことを基礎研究の遅れと自省していたが、それ以降14名の方が日本人として、あるいは日本国籍時の業績で自然科学系のノーベル賞を受賞しておられ、そのうち7名は工学部出身か工学博士である。この方々は、「教育改革」後に工学教育を受けられたわけではない。これらの事実違和感を覚えるのは私だけだろうか。

誰もを受けて来た教育の結果として現在の自分があ

る。その自分の形成にシステムとしての教育がどの程度影響を及ぼしているかどうかはひとそれぞれであろう。しかし、教育、特にカリキュラムなどのシステムとしての教育を論ずる場合には、少なくとも自分が受けて来た教育と今の自分の関係を総括したうえで行う必要があるのではないかと常々思っている。すなわち、自分が受けて来た教育のどこが良く、そして現在あるいは将来の変化を考えたときに、その教育では何が足りないかを論ずるべきではないか。

教育の効果が現れるには時間がかかるのは誰もが知っている。また、人が成長する時期もひとそれぞれである。それが教育の難しいところでありフィードバック制御がしにくい原因である。何事も評価ができると信じ込んでいるかのごとく、すぐ評価がなされる現状に大いなる違和感を覚えているが、少なくとも評価の対象が教育である場合には特段の注意を払うべきだと考える。だからこそ、教育をプロジェクトにすべきではない。きっちりと議論をした上で方針を決めたら、それを信じて長年やり抜くしかないのではないだろうか。もちろん、その途中で学問の発展に応じた修正を行うのは言うまでもないことである。

高松 洋

1980年 九州大学工学部動力機械工学科卒業

1985年 同大学院工学研究科博士課程修了 工学博士
九州大学生産科学研究所 助手

1990年 九州大学機能物質科学研究所 助教授

2004年 九州大学大学院工学研究院 教授

2015年 同工学研究院長・工学府長・工学部長、九州
工業教育協会会長

2015年5月21日受付